

子どもたちに 教職員に ゆとりと豊かさ 平和を 教職員が生き生きと働き続けるために

今年度もよろしく申し上げます 全群教・全群馬教職員組合です

清掃する生徒を「ながめながら」ひとりひとりを「評価」し段階をつける。もっとも高い「評価」の生徒から「一人」だけ選び、その生徒だけにあめ玉をあげる。その「あめ玉」は生徒たちがお金を出して買ったもの。そして生徒たちは「評価」を気にしながら、あめ玉をもらえる「一人」になることを目的に清掃するようになっていく。

もしこんな学校があれば教育はダメになる。教師が教師として生徒の前に立つことなどできない。

いま学校で行われている「人事評価」とどこが違うだろうか。

ファストフード店でアルバイトをする。

休日の朝7時には店に行き開店準備。

午前8時開店。

閉店は午後5時だが、片付けをし、帰宅するのは午後8時。その間ずっと働いている。途中でトイレに行くことが何度か。昼食は店の隅で立ったまま短時間ですませる。

支払われたアルバイト代は開店から閉店までの9時間から「休憩時間」1時間を引いた8時間分。抗議をすれば、あなたが好きで早く来て遅くまでいるだけ、「休憩」もあなたがとらないだけ、自分で休憩できるようにしないからと返される。

こんな店があれば、あきらかな違法行為で摘発され責任者は懲役か罰金という重罪を科せられる。

いま学校で行われている「働き方改革」なるものどどこが違うだろうか。

予定されている産育休の代替配置ができない。病休を取りたい人が、代わりが見つからず我慢する。教員志望者が激減と報道される。子どもたちの「なりたい職業」から先生が消えて久しい。

未来をつくる子どもたち、子どもたちを育てる学校、そこにはお金をかけない政府。「ギガスクール構想」などと旗をふる人は「日本に教師など教科にひとりいればよい」と語る。

いつからこうなってしまったのだろうか。

わたしたち教職員の仕事は子どもたちの未来をつくることだと語った先輩がいます。教育は崇高で責任の重い仕事だけれど、やりがいと夢があり喜びも大きい仕事だ、とも語ってくれました。

どんな困難のなかにあっても、こうした教育という仕事の意味は、いまでも変わっていないと思います。子どもたちとの出会いの日々がそれを示してくれています。なによりコロナ禍のなかにあっても、子どもたちによりそいままような教育をすすめるよう努力する多くの教職員がいます。

だからこそ、わたしたち自身が生き生きと仕事のできる環境をつくらなければならないと思います。なによりも子どもたちが生き生きと学校で過ごす環境と条件をつくらなければならない。そう切実に思います。そして、困難のなかで奮闘する子どもたちと教職員に寄り添う全群馬教職員組合でありたいと思っています。

新年度が始まりました。また新しい出会いの中で学校生活が始まります。

今年度もよろしく申し上げます。